

いじめ対応と予防について

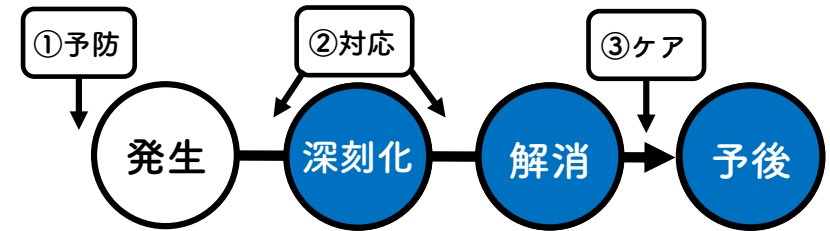
アプリを用いた事例をもとに

加藤 弘通

北海道大学大学院教育学研究院

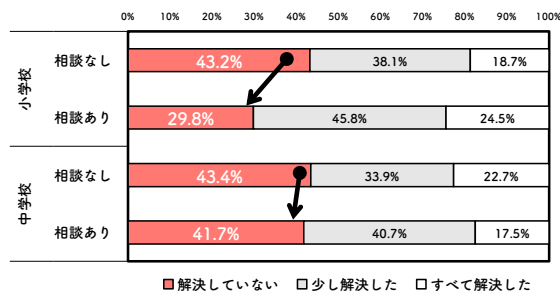
1

立場：プロセスとしてのいじめ



いじめ対応の課題

援助要請 (SOS教育) ≤ 教師の解決力



■ 解決していない □ 少し解決した □ すべて解決した

図1 教師への援助要請と解決率

東京都教職員研修センター(2014)
被害にあっても相談しない者の割合

小学生 38.9%
中学生 50.8%
高校生 51.8%

相談しない理由
悪化するから 75.4%
解決しない 54.3%

アプリ リスク評価と即時対応



4年1組のいじめアラート	発生日時	発生場所	発生状況	発生確認状況
2023年4月	2023/04/19 - 2023/04/26	アクトー、図書	完全解決済み	2023/04/28 - 2023/05/02

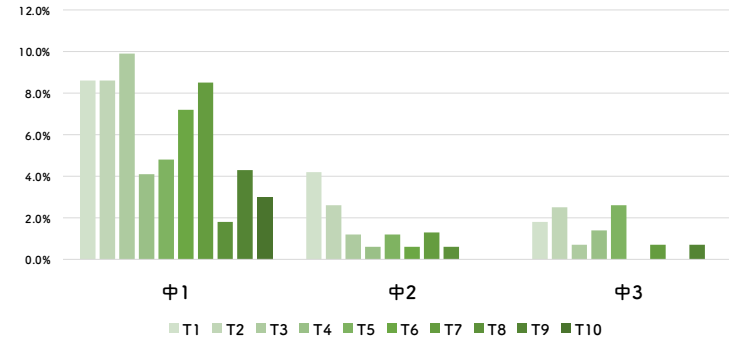
先生名	対応状況	対応状況	対応状況
1番: シヤゴダン 次郎1	未確認	未確認	未確認
2番: シヤゴダン 次郎2	-	未確認	未確認
3番: シヤゴダン 次郎3	-	未確認	未確認
4番: シヤゴダン 次郎4	-	未確認	未確認
5番: シヤゴダン 次郎5	-	未確認	未確認
6番: シヤゴダン 次郎6	未確認	未確認	未確認
7番: シヤゴダン 次郎7	-	未確認	未確認
8番: シヤゴダン 次郎8	-	未確認	未確認

手続き



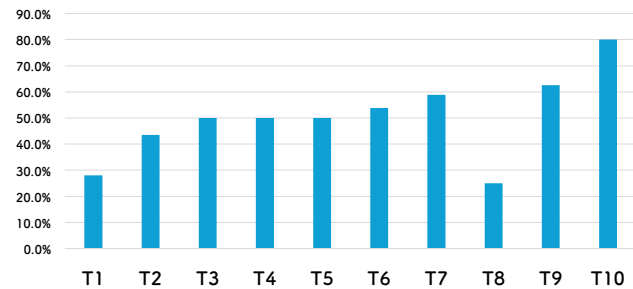
効果はあるのか？

図2a 被害発生率の推移 (●+●) /生徒数



効果

図3 被害時に教師への相談した者の割合



被害の減少とともに、教師への相談が増加・安定

援助要請 → 対応 ≤ 対応 → 援助要請

2年間の推移

図5a 被害発生率の推移 (前年度)

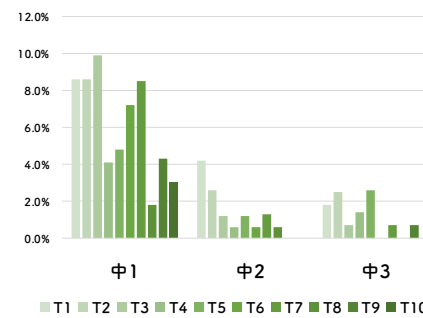
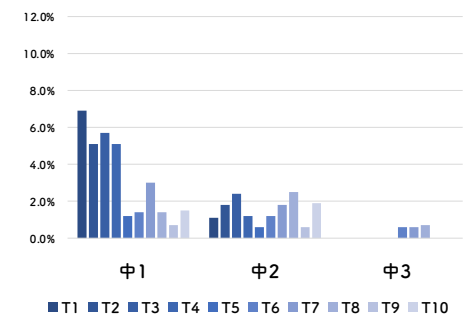
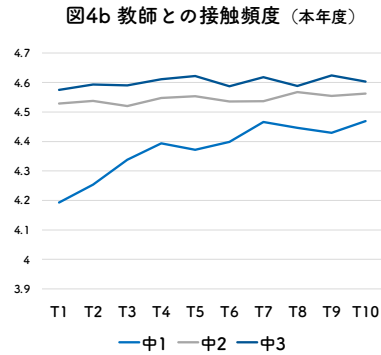
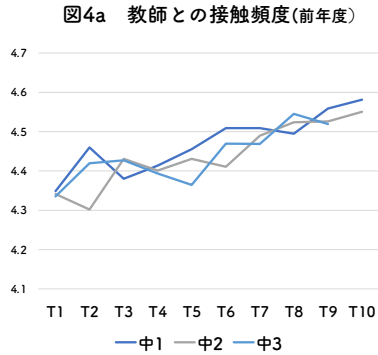


図5b 被害発生率の推移 (本年度)



被害発生の抑止効果は翌年にも継続しているようにも見える



短期：いつ・どこを潰す **SOS** → 中期：教師との関係の改善
 2・3年生は昨年度の最後に到達した水準が維持されている



研究：プロセスとしてのいじめ

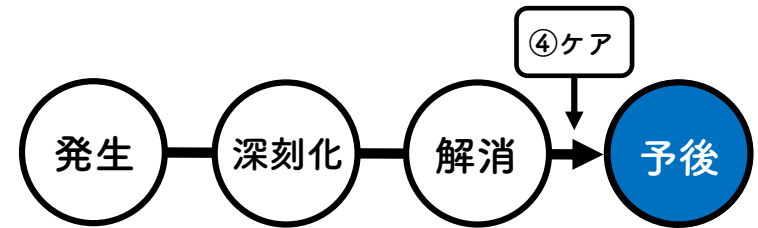


図6 いじめ被害の影響

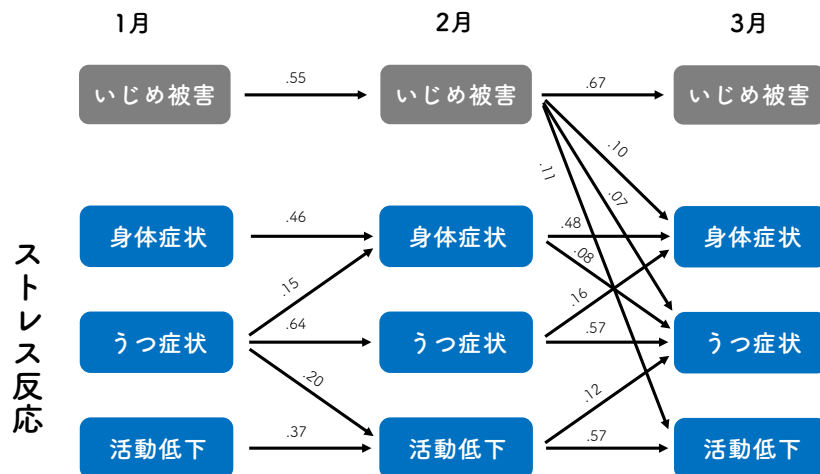
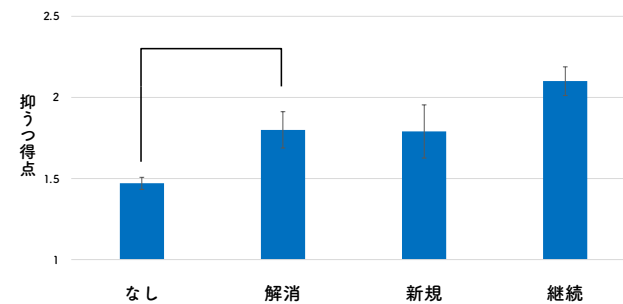


図7 いじめの被害状況による抑うつの違い



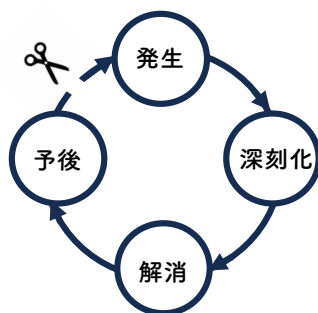
- 👉 いじめ解消だけではダメで予後のケアが必要
- 👉 抑うつは攻撃性に関連する (武田・六角, 2000; Yu et al., 2017)

予後：ケア

		加害なし	加害あり
男子	被害なし	43.0%	14.9%
	被害あり	8.7%	33.4%
女子	被害なし	55.0%	16.2%
	被害あり	11.0%	17.8%

自傷行為のリスクを高める

小学生で約3倍、中学生で約4.5倍
保護者の要因 約1.2倍 (穴水・加藤・太田, 2018)



予後のケアは予防でもある

リスク要因

1. 被害は潜在的な攻撃性を高める (舒ら, 2024)

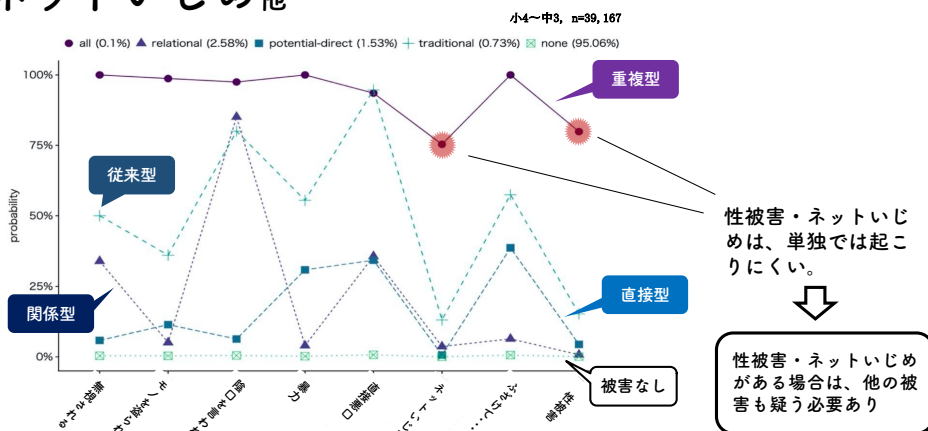
いじめ深刻化のリスク要因 (加藤・藤井・太田, 2018)

1. 加害者に被害経験があるとき
2. 学級崩壊や学級の荒れが起きているとき
3. 教師が認知し、かつ解決に向かっていないとき
4. 被害者に加害経験があるとき
5. 加害者が教師との関係が良くないとき
6. 被害者が教師との関係が良くないとき

2. 被害経験は深刻度・無差別化を高める (手段の学習・トリガーの解除)

(舒ら, 2024)

ネットいじめ他



Shu, Y., Ota, M., & Kato, H. 2025 The Diverse Nature of School Bullying and Its Relation to Depression and the Efficacy of Coping Strategies in Japan. International Journal of Bullying Prevention, 7, 137-151.

まとめ

1. シンプルな対応でも効果がある

☞ 指導・事実認定 ≒ 被害の解消

2. 発達の順序性

SOS → 対応 ☞ 対応 → SOS

☞ SC: 小学校 > 中学校

3. 予後のケアが予防につながる

☞ 多職種 (SC, 医療 etc.) がいじめにかかわれる余地